

Fiction and Reality of Marguerite Duras' Family Mythology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 孝江 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6023

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



マルグリット・デュラス

— 家族の神話の虚構と現実 —

松 田 孝 江

【キーワード】 デュラス, 小説技法, 家族の神話, 虚構と現実

1. はじめに

デュラスは 82 年の生涯で多くの作品を残しているが、代表作『太平洋の防波堤』と『愛人』は、18 歳まで暮らした仏領インドシナを舞台にした作品である。1950 年、36 歳のとき発表した『太平洋の防波堤』はたちまちベストセラーになり、惜しくもゴンクール賞は逸したものの、この作品によってデュラスの作家としての地位が確立した。また 1984 年に出版された『愛人』も評判になり、70 歳にしてゴンクール賞を手にしたのだった。これらはいずれも自伝的色彩の濃い作品で、登場人物はデュラスの家族と、それをとりまく現地のひとびとである。7 歳で父と死別したこともあって、一家の要である母親は物語の中心にいて、愛憎を込めて描かれている。自伝的とはいえ、これら二作品は小説である以上、そこに描かれた姿が現実の母親そのままとは言えない。しかしデュラスの場合、小説を離れたインタビューや随筆でもしばしば母親について語っていて、それは物語の延長のようでもあり、デュラスの読者たちは、あたかも小説に描かれた母親が現実の姿そのもののよう考えてしまいがちである。本稿では、小説の中の母親、デュラスが紹介してみせる母、生身の母を手がかりに、デュラスによる“家族の神話”を読み解いてみたい。

2. 母マリーは本当に農婦だったのか

デュラスはテレビ放送番組のインタビューで、母についてつぎのように語っている。

「[...] 母はもともと農婦なの、農婦だったの。母は奨学金を受けて小学校教員養成所で学んだけれど、母の両親は、北フランスの小作人だった」⁽¹⁾。

デュラスの伝記としては、近年デュラスの研究者であるジャン・ヴァリエ Jean Vallier が、二巻からなる実証的な労作を出している。われわれはヴァリエの伝記に依拠してデュラスの母の軌跡をたどってみることにする。

作家の母マリー・ルグラン Marie Legrand は、1877 年にベルギー国境に近いパ・ド・カレ県の村フルージュ Fruges に生まれた。当時の出生証明書には、父アレクサンドルは穀物卸売商 négociant と記されている⁽²⁾。アレクサンドルはほどなくして穀物商からパン屋に転じた。19 世紀後半にこの地方を襲った穀物価格の暴落が原因だったらしい。デュラスの母が物心ついた頃には、

すでにパン屋に転じていたものと思われる。

フルージュを筆者が訪れたのは、2013年8月半ばのことだった。県道928号線が村の中心部を貫き、道路沿いに村役場と教会がある。村役場に接する馬市広場 Place du marché aux chevaux は、田園地帯にあって物流の要であるこの地で、馬の売り買いがなされていたことを物語っている。現在人口2,500名ほどのこの村は、母マリーの出生時には3,000人の住民がいた。マリーは村役場から300メートルほど先にある聖ベルテュルフ教会で洗礼を受けたのだった。マリーの両親は、教会通り（現クレール將軍通り Rue du Maréchal Leclerc）をはさんで教会正面あたりの県道沿いに店を構え、パン屋を営んでいた。

デュラスはエッセイの中で母について語っている。

わたしの母は緑色の目をしていた。髪は黒かった。マリ・オギュスティヌ・アドリーヌ・ルグランという名だった。ダンケルクにほど近い農家の娘として生まれた。一人の姉と七人の兄弟がいた⁽³⁾。

「…」それから泣き出した、ヴェルダンで戦死した彼女の二人の兄弟のことを思いながら泣いていた、泣いていた⁽⁴⁾。

伝記によれば、母マリーは初子であり、姉はいなかった。マリーの下には、4人の弟が生まれ、最後に双子の女兒が生まれたが、末の妹は一歳半の短命だった⁽⁵⁾。また第一次世界大戦で戦死したのは、長男のアレクサンドルひとりである⁽⁶⁾。マリーの両親はともにこの地の出身で、5人の弟妹の他に従兄弟も加わった、賑やかな日常生活が繰り広げられていたに違いない。村の中心にあるパン屋の娘が、デュラスの筆にかかるとうして農家の娘、農婦になるのか。農民には二種類あって、paysan propriétaire と paysan fermier がある。前者は耕地を所有している自作農だが、後者は他人の土地を耕す小作農である。先に引用したデュラスのことば〈母の両親は、北フランスの小作人だった〉は、原文では、「…」 mais ses parents étaient fermiers dans le Nord.⁽⁷⁾ とあり、祖父母を小作農と断定している。母の両親は本当に貧農だったのだろうか。

1914年にサイゴン郊外でデュラスが誕生した時、母マリーは37歳だった。その後1歳から3歳までの2年間を、一家は父の病氣治療のためにフランスで過ごす。母方の祖父はこの時すでに67歳になっていて、フルージュから南西に50キロのフレヴァン Frévent に近い、ボニエール村 Bonnières に住み、マリーの弟たちはそこでクロワゼット Croisette と呼ばれる農場を経営していた。デュラスが二度目にフランスで過ごすのは、治療のためにひとり帰国していた父が急死してから半年後の、1922年8月からの2年間である。最初の帰国時はまだ物心つかない幼子だったデュラスも、2度目のフランス滞在は8歳から10歳までにあたる。上陸すると、母マリーはまず実家に向かい、そこで一か月を過ごしている。デュラスは高齢の祖父母に加え、叔父たちに農民の姿を認めたことは間違いない。

母マリーの出自を農民とするのは、垣間見た母の実家の様子からといってよい。引退前の祖父は、パン屋を経営するかたわら農業をやっていたかもしれない。しかし小作人ではなかった。叔父たちもかなり豊かな自作農だったのである。あえて貧しさを強調するわけは、三人の幼子を抱えて孤軍奮闘する母の姿を際立たせるためと考えられる。マリーは二度のフランス滞在中に、先妻アリスの遺児ジャンとジャックもボニエールへ連れていったらしい。後年この二人は、ボニエールでは慣れない農作業をさせられた、と周囲に語っていたそうである⁽⁸⁾。

ところで母マリーは、将来について娘に語っていた。

わたしが書いたものを母は好きではなかった。全然好きではなかった。彼女は絶えずわたしに言ったものだ。——「お前は商売に向いているよ。商売をおし」。農民の娘だった母は、商売をしなかったことを生涯後悔していた⁽⁹⁾。

ここに見られる、デュラス自身による母への言及は、デュラスのそこここでの語りが事実とは異なるために、ちぐはぐなものとなっている。デュラスの母の出自は「農婦、小作人」ではなく、「商人」だった。マリーはパン屋を営む両親の姿を見て育った。店は村の人々で賑わい、マリーは日銭が入る商売を、悪くはない職業と思っていたのだろう。だから娘にも勧めたのだ。それは後悔から出たのではなく、実体験が言わせた忠告ではなかったか。

3. マリー・ルグランを植民地に向かわせたもの

母親が37歳の時に生まれたデュラスは、それまでの母の人生について、どの程度知っていたのだろうか。デュラスは次のように書いている。

私は彼女の女としての生活、娘としての生活、妻としての生活を知らない。私は彼女を私たちの母親と見ており、それがすべてなのだ⁽¹⁰⁾。

“貧農”の娘として北フランスの寒村で生まれた女性が、37年後にはベトナムのハノイで教師を勤め、三人の子供の母となっていた。これについて、デュラスは次のように説明している。

〔母は〕給費生として師範学校を終え、ダンケルクで教鞭をとっていた。彼女のクラスを視察した視学官が、その翌日、結婚を申し込んだ。青天の霹靂だった。二人は結婚し、インドシナに出発した。1900年と1903年の間のことである。一種の兵役志願であり、冒険であり、願望のためだった。ひと財産つくるためではなく、成功願望のためである。彼らは英雄として、パイオニアとして出発した⁽¹¹⁾。

6人の子供に恵まれたマリーの両親にとって、家業のパン屋が順調だったとしても、生活は決して楽ではなかったに違いない。幸い長女のマリーは、学業成績が良かった。マリーは18歳の秋には親元を離れ、ドゥエ Douai にある女子師範学校に進学した。三年制のこの学校は、1学年50名ほどで、パ・ド・カレ県を含むこの地方の五つの県からやってくる女生徒はすべて給費生で、全寮制だった。1898年、学業を終えた21歳のマリーは、ダンケルクから20キロ離れた、人口1,700人ほどのレクスポード村 Rexpoëde の小学校の助教として教員生活をスタートさせた⁽¹²⁾。2年後にはダンケルクに転勤、そして1904年に27歳で最初の結婚をした。出会いは“友達の紹介”ということになるのか。フラヴィアン-マリー・オブスキュール Flavien-Marie Obscur は、パリ生まれの30歳で、植民地のインドシナで教員をしていた。休暇で帰国していたフラヴィアンは、ダンケルクの友人の所に遊びに来ていてマリーを見初め、求婚したのだった。結婚式はマリーの郷里フルージュで執り行われた。新婚の二人は1905年3月にサイゴンに到着し、ともに教師として働き始めた。デュラスは母の最初の結婚について勝手なストーリーを展開しているが、事実を知らなかったわけではないだろう。小説『愛人』を読んでいると、次のような一節に出会う。

ダイヤの指輪を見たとき彼女は小声で言った、これを見るとき思い出すねえ、最初の夫と婚約したとき、あたしのはめた指輪のちっちゃな粒をね。わたしは言う、謎のだれかさんのことね。みんなが笑い声をあげる。そういう名前だったよ、と彼女は言う、でも本当のことなんだよ⁽¹³⁾。

ここで 1877 年生まれのマリーはどのような社会情勢の中で成長したのかをみておこう。

1870 年に普仏戦争に敗北したフランスは、ナポレオン 3 世が退位して第三共和政になった。その後 1873 年から 1895 年にかけて、ヨーロッパは経済不況に見舞われた。ぶどうの木を枯らす害虫の猛威にさらされたワイン産業の危機、アメリカ産小麦の流入、アルゼンチンとオーストラリアから輸入される羊毛に押される繊維産業の不振等が重なったためである。1895 年以降の景気回復に寄与したひとつが、植民地政策の展開だったことは間違いない。ベトナムの支配をめぐる中国清朝との戦争は、1885 年にフランスの勝利で終結した。1887 年には仏領インドシナが成立、1894 年に植民地省が新設された。

第三共和政のもうひとつの特色は、1881～1882 年成立のフェリー法による、初等教育の義務・無償・世俗化である。資格を持たない教会関係者の教育への関与を退け、初等教育は師範学校出の教師たちに委ねられ、公立学校での宗教教育は禁止された。こうしてフェリー法の成立直後から 1900 年までのあいだに、フランスではおびただしい数の小学校が建てられた。また、それ以前は、男子と比べて遅れていた、女子に対する初等・中等教育も次第に改善された。ドゥエには、1833 年設立の男子師範学校はあったが、マリーが 1895 年に入学した師範学校は、1883 年に新たに建てられている。

マリーの人生は、まさにこうした世の中の流れに添う形で展開していったのである。

4. マリーとアンリ・ドナデュとの出会い

マリーの最初の夫フラヴィアン・オブスキュールについては、いくつかあるデュラスの伝記を読んでも判然としなかったが、明らかになったのは、ジャン・ヴァリエによる伝記のおかげである。フラヴィアンはパリで 5 年間小学校教師として勤務したのちインドシナに渡り、1900 年末から教師として働き始めた。1903 年には、サイゴン近郊のギアディン Gia Dinh の師範学校で教師をしていたことが記録により確認されている⁽¹⁴⁾。ところで厳しい環境で働く植民地の教員には、3 年間連続勤務すれば、その後 6 か月のあいだ本国での休暇が認められた。フラヴィアンとマリーを結びつけたのは、この休暇だったのである。二人は 1905 年 3 月にサイゴンに到着した。夫はギアディンの師範学校に復帰し、妻も公立の女子校で教壇に立った。しかしフラヴィアンは最初の現地勤務中に、すでにマラリア等の感染症に罹患していたらしい。彼は帰任当初から体調が優れなかった。結局夫婦は病気を理由に、1906 年 10 月にはサイゴンを離れ、11 月に帰国したのだった。フラヴィアンは直ちにピレネー山中の湯治場で公費による治療を受けたが、1907 年 2 月にその地で亡くなってしまった。30 歳で寡婦になったマリーは、あれこれ悩んだに違いない。しかし再び植民地に向かい、1908 年 12 月 1 日にサイゴンに到着すると、翌日から女学校の教壇に立った。

ところでオブスキュール夫妻がサイゴン入りした 1905 年 3 月をさかのぼる 1904 年 12 月 30 日に、アンリ・ドナデュなる人物がサイゴンに上陸していた⁽¹⁵⁾。彼はクリスマス休暇が明けると、ギアディン師範学校で教え始めた。フラヴィアンとアンリは、フラヴィアンが離任する 1906 年秋までの数か月のあいだ、同僚だったのである。

アンリ・ドナデュの弟ロジェは、1895 年に海兵隊員としてインドシナに駐留したが、除隊後も
(199)

測量技師として現地に留まり、1898年と1902年の2回にわたり、数か月の休暇をフランスの家族のもとで過ごしていた。兄の植民地勤務は、弟に触発されたために相違ない。34歳のアンリは、国もとに妻アリスと5歳の長男、生後6か月の二男を残しての単身赴任だった。ギアディン 師範学校におけるアンリの評判は上々で、着任した翌年には、急死した前任者のあとを襲って校長に昇格した。生活も落ち着いたところで、1905年秋には、妻と二人の子供をサイゴンに呼びよせた⁽¹⁶⁾。

マリーが夫の葬儀を済ませてサイゴンに戻ったのは、1908年の12月だったが、ドナデュ一家は休暇でフランス滞在中で、サイゴンに戻ったのは1909年3月のことだった。しかし妻アリスはその2か月後に病死してしまう。後には10歳と5歳の息子二人が残された。同じ時期に、弟ロジェも体調を崩して帰国してしまった。互いにパートナーを亡くした二人が結びつくまでに時間はかからなかった。二人はこの年の秋、1909年10月20日に結婚した⁽¹⁷⁾。そしてピエール、ポール、後のデュラスであるマルグリットが生まれるのである。

植民地に勤務する教員の給与は内地の2倍で、3年連続勤務の後には6か月の有給休暇が保障されていたとはいえ、現実には厳しかった。マラリアや赤痢で命を落とすことが少なくなかった。アリスとフラヴィアンは、32～33歳の若さで死亡している。マリーの再婚相手のアンリも、2度目の帰国療養時、1921年12月に49歳でこの世を去る運命にあった。

5. 『太平洋の防波堤』をめぐって

『太平洋の防波堤』に関して、デュラスはインタビューで次のように語っている。

「[…] 20年間公務員の職に就いて働いて、それから母は、カンボジアでカムボットの近く
の分譲地を買った」

「払い下げ地？」

「そう、いわゆる払い下げ地ね。そして母に渡されたのは…彼らは、この女がひとりで、寡婦になって、守ってくれる人もなく、ほんとうにひとりぼっちでやってくるのを見て、彼女に耕作不能な土地を押しつけた。母は全然知らなかった、耕作できる土地を手に入れるためには、土地管理局の役人たちを買収しなければならないということを。彼らは母に土地を与えたけど、それは土地なんてものじゃなかった。一年のうちの半分は水に浸される土地だった。そして母は、その中に20年間の貯蓄を注ぎ込んだというわけ。[…] 母は告訴した、反抗した。でも、その当時は汚職がひどくて、すべての役人が…土地管理局の役人たちから、植民地の総督官に至るまでの全員が金を受け取っているということは、公然たる事実だった。つまり、賄賂がどの階級の官吏にも分配されていたのよ。だから、告訴は水泡に帰し、最後には、うやむやにされてしまったの。母は、訴訟に勝つことなく死んでしまった。——そう、不正が完全に実行されたというわけ。[…]」⁽¹⁸⁾

『太平洋の防波堤』はかなりの長編であるが、上記が物語のバックボーンになっている。これははたして事実だったのだろうか、それともフィクションなのだろうか。ジャン・ヴァリエは現地で様々な資料にあたり、当時の植民地の農地開拓政策とマリーとのかかわりについて詳しく調査した結果、小説に盛られた内容は事実とはかなり異なると結論づけている⁽¹⁹⁾。

1911年に植民地総督府はつぎのような通達を発表していた。公有農地の分譲について、現地人は無償で手に入れることができるが、本国からの公務員に対しては有償とする。しかしフランス人

公務員への払下げは、あの手この手を使った権力の乱用を防ぐため、かなり制限されていた。ところがその後、ゴム栽培の機運の高まりによる投機的な土地の買い占めを危惧した当局は、1927年に通達を出して、公務員への土地取得制限を緩めたのである。とはいえ条件が撤廃されたわけではない。入札にあたり、希望する区画を予め願ひ出ることにはできない、一定の期間内に農地としての開墾を完了させ、そこに至るまで、全面的な名義変更ができない等々。

デュラスの母マリーが土地購入のために入札に参加した形跡はない。それではいつ、誰から購入したのか。入札に参加して、無料で土地を手に入れたベトナム人から買い受けたのである。フランス人教員が土地を取得した場合、植民地総督とサイゴンの教育局に報告することが義務づけられていた。ジャン・ヴァリエはマリーが総督宛てに送った、1929年9月5日付けの報告書をカンボジアの国立公文書館で発見した⁽²⁰⁾。それによれば、無料で手に入れた払下げ地をマリーに売却したのは、ヴィンロン Vinh Long に住む農民だった。この男は1923年2月27日に取得した200ヘクタールの土地を、1927年7月28日にマリーに売却したのである。マリーは1924年の秋から1927年の夏までヴィンロンの女学校で校長をつとめ、その後サデック Sa Dec に転勤したが、二人は顔見知りだったのだろう。権利を取得するにあたって、マリーが相手にいくら払ったかは報告書には書かれていない。ただ耕地としての整備がなかなか進まないで、整備期限を延長してほしいと嘆願している。土地の名義が完全にマリーになるのは、購入から10年後の1937年である。それにしてもこの土地は、マリーの勤務地であったヴィンロンやサデックから600キロも離れていた。管理がままならなかったとしても不思議ではない。物語では、海水に浸かって作物を育てることのできない土地を買わされたのは、役人に賄賂を渡さなかったためで、植民地を治める役人は、上から下まで賄賂を受けとる、堕落しきった人たちだと断っている。賄賂が横行していたかどうかは別として、知り合いのベトナム人から権利を買い取ったとしたら、それは単なる商取引にすぎないのであって、物語の根幹が揺らいでしまう。そこでデュラスは、事実とは異なる脚色を加えたのである。

この物語が発表された1950年は、1946年に始まった第1次インドシナ戦争のさなかであった。1949年にフランスの支援のもとに成立したベトナム共和国は、ホーチミン率いるベトナム民主共和国と熾烈な戦いを繰り広げ、1954年にフランス軍がディエン＝ビエン＝フーで敗れたのを機に、休戦協定によってベトナムは南北に分割された。この小説がベストセラーになったのは、当時インドシナ半島の情勢が焦眉の問題だったことと無縁ではない。

6. 母と三人の子どもとの関係について

デュラスには5歳年上の兄ピエールと、2歳上のポールがいた。三人のうちピエールは母のお気に入りだったが、下の二人は邪険にされたという。これについて、デュラスはエッセイの中で次のように書いている。

彼女は上の兄を、愛人を、男を愛するように愛していた。兄が大きくて、ハンサムで、男性的で、ヴァレンティノみたいだったからだ。他方、下の兄とわたしは、上の兄のそばでは、ノミのような存在でしかなかったのだ⁽²¹⁾。

『太平洋の防波堤』の中でこのテーマは、母親の、兄ジョゼフと妹シュザンヌへの接し方の違いに投影されている。上記は小説からあふれ出てきたようで、フィクションとの間に、境目も矛盾もない。はたしてこれは真実なのだろうか。

単身帰国していたアンリが病死したのは1921年12月だった。マリーは、仕事が一段落した翌年の7月初めに、子ども三人を伴って帰国した。夫が死の半年前に購入した、15ヘクタールの農地付き屋敷の相続をめぐる、先妻の二人の息子たちとどう折り合うかが難題だった。他方、知り合いのデュフォ Duffau 神父には、子供たち三人の監督後見人になってもらった。1924年7月に3人の子どもを連れてサイゴンに帰任したマリーを待っていたのは、厳しい現実だった。子どもの学校のためにハノイかプノンペンでの勤務を嘆願したが聞き入れられず、任地はメコンデルタのヴィンロンだった。このような状況のもと、三人の子どものうちで最も恵まれたのはマルグリット、最も困難な道を歩かされたのは長男ピエールだった。マルグリットはプノンペンにある、帰国前に通っていた学校に復学した。ポールはヴィンロンで母と暮らした。ピエールは、ひとりフランスに戻って、デュフォ神父のもとから、宗教色が強く、厳しい規則の私立学校へ通うことになった。この選択が子供たちの将来に決定的な影響を及ぼすことになる。マルグリットはその後サイゴンのリセに移って、大学入学資格であるバカロレアの準備をする。ピエールは学校にも、厳しいばかりのデュフォ神父にもなじめず、母の親族を頼ってパリに行くが、13歳で一人フランスに送り返されたピエールは、さぞ心細かったことだろう。パリの親戚のもとにいたとき、虫垂炎の発作で緊急入院した未成年のピエールは、遠く離れたボルドー南東部で暮らしていた、異母兄のジャックに連絡して来てもらい、2日間付き添ってもらったという⁽²²⁾。母が1927年に農地の購入契約をした直後から2年間ほど、ピエールは母のもとにきて過ごしている。しかし正規の中・高等教育を受けることなく成人したピエールは、定職につくこともなく、借金を重ねて周囲の鼻つまみ者になってしまう。他方母の元に残ったポールは、インドシナ銀行サイゴン支店の会計係を勤めた後、通信教育で学び、労働条件視察官に転じた。しかし残念なことに、1942年に31歳という若さで、サイゴンで病死してしまう。娘の資質を見抜いていた母親は、夫の遺産を最終的に処分するために帰国していた1931年から1932年には、デュラスをパリ的高级住宅街にある、ブルジョアの子弟が通う私立のリセで一年間学ばせるという配慮までしている。ところが作家となったデュラスは、作品の中でもインタビューやエッセイでも、ピエールだけが母のお気に入り、自分と弟は嫌われ者だった、という図式をことあるごとに強調するのである。確かに大人になったピエールが身を持ち崩して、植民地時代の友人とアヘンなどの薬物に手を出し、借金まみれの生活をしている状態は、名声を得たデュラスにとっては、迷惑以外の何物でもなかったかもしれない。しかし母親の長男に対する偏愛、ないがしろにされた弟と妹という図式は、フィクションの中だけならいざ知らず、事実はまったく逆なのである。

母マリーにとって、夫の死後の10年間は、経済的にも精神的にも試練の日々が続いた。

しかし1930年代に入ると、彼女はサイゴンに職も家も得て、平穏な日々を過ごすようになる。1933年に最終的に帰国して、パリ大学法学部に入学したデュラスが、充実した学生生活を送ることができたのも母の援助のたまものだった。

1936年に公立学校を定年退職したマリーは、現地人とフランス人の生徒100人ほどが学ぶ学校を自宅の敷地内に設立した。この学校は評判が高く、マリーは最終的に帰国する1950年までここで働いた。帰国した時すでに73歳になっていたマリーは、2年後にロワール川のほとりのオンザン Onzain に大きな家を購入し、ピエールも母の家から15キロほど南東の村ナゼール-ネグロン Nazelles-Négron に住んだ。

帰国直後の母と、母を迎えたピエールをモデルにした中編小説 *Des journées entières dans les arbres* 『木立の中の日々』(1954年)は母マリーを打ちのめした。作品は次のような内容である。

帰国した直後、息子とその愛人が暮らす家に泊まった母は、息子が働くモンマルトルの酒場を訪れ、シャンパンを注文して酔いつぶれてしまう。その後、代金 5,000 フランを請求されて仰天する。ともかく支払いを済ませ、タクシーで帰宅すると、疲れて寝入ってしまう。その間に息子は、母が大切に持ってきた 17 個の高級ブレスレットの束からひそかに 2 個を抜き取って、モンマルトル界隈で悪友に売りさばく。

デュラス自身は後年ル・モンド紙（1977 年 2 月 10 日付）に次のように書いている。

本を出版したとき、わたしは母に会うため、ロワール河畔に彼女が買った最後の家に行った。母は一人きりで、黒い服を着て、寝たままわたしを迎えた。彼女はわたしに話すことも、抱擁することも拒否した。彼女はただこう言うのだった、『木立の中の日々』の息子の話のような根拠のない、こんな話をわたしがつくり上げたことが理解できない、と。彼女はつけ加えた、子どもたちに対する彼女の態度は正しかったと確信している、彼女は三人のためにこんなにも自分を犠牲にしてきたのだ、と。わたしは彼女に説明しようと試みた、一人の子どもに対して持った偏愛は、ほとんど感知できないほどの、ごくごく小さな細部によって表現されること、たとえ母に全く責任がないとしても、愛におけるこうした差別はより少なく愛される子どもたちによって不幸として受け止められるのだということを。母は聞いていなかった。母はわたしが彼女に言ったことが理解できないと言った⁽²³⁾。

その後マリーは娘に会おうとせず、1956 年にピエールに看取られて 79 年の生涯を閉じた。ピエールは、母をナゼール-ネグロンの村の墓地に埋葬した⁽²⁴⁾。

デュラスの筆の犠牲になったのは、母とピエールだけではない。ナチスの強制収容所から奇跡的に生還した元夫のロベール・アンテルム（1917-1990 年）は、辛い体験について、余りに個人的なことまで作品に書かれ、ひどく傷ついた。1970 年以降、彼はデュラスに会うことを避け、その作品も読まなくなったという⁽²⁵⁾。

7. おわりに

デュラスのように、自伝的要素を題材にした物語を書く作家の身近にいる人々は、私生活を暴かれる危険を覚悟し、用心しなければならないのかもしれない。登場人物にモデルがいたとしても、登場人物の“殺傷権”は作者の手中にある。デュラスの場合、物語がベストセラーになって世の中に定着すると、小説の中の登場人物は物語の枠を抜け出し、実在の人物そのもののようには振る舞い始める。そしてその操り手がデュラス本人である。インタビューやエッセイの中で、小説に書かれたすがたを、現実そのものとして紹介し、語るのである。やがてその神話は現実のものとして定着してゆく。これがデュラスの手法なのである。神話を現実のものとして担わされたひとびとは深く傷つき、デュラスが語り、書くものには触れないように、離れていく。母も、別れた夫ロベールもこうして離れていった。

晩年、孤独をかこっていたデュラスの前に現れた救いの神が、ヤン・アンドレアである。

自作の「インディアン・ソング」の上映会のためにカーンにやってきたデュラスと、ヤンが出会ったのは 1975 年 11 月のことで、デュラスは 61 歳、ヤンは 23 歳でカーン大学の学生だった。ヤンはそれ以降、デュラスにファン・レターを送り続けた。5 年後の 1980 年の夏、ヤンはデュラスの招

きに応じて、ノルマンディーのトゥルヴィルにある、デュラスのマンションを訪れた。その時から、デュラスが82歳で世を去るまで、二人は生活をともにすることになる。ヤンは小説の紡ぎ手としてのデュラスに徹底的に奉仕した。ヤンのはからいで、入院治療によって重度のアルコール依存症を脱したデュラスは『愛人』（1984年）を書き上げ、70歳にして作家としての健在ぶりを世に知らしめた。感情に流されない、強靱な作家魂は、母の庇護のもと、18歳まで過ごした植民地の厳しい自然のなかではぐくまれたのであろう。そして、そこを舞台に物語を紡ぐとき、デュラスの筆は冴えるのである⁽²⁶⁾。

注

- (1) デュラス／ポルト（1977），舛田かおり訳（1995）p. 104
- (2) Vallier（2006）p. 39
- (3) デュラス（1993），谷口正子訳（2003）p. 259
- (4) *Ibid.*, p. 269
- (5) Vallier（2006）p. 41
- (6) *Ibid.*, p. 115
- (7) Duras/Porte（1977）p. 56
- (8) Vallier（2006）p. 89
- (9) デュラス（1993），谷口正子訳（2003）p. 261
- (10) デュラス（2006），田中倫郎訳（2008）p. 358
- (11) デュラス（1993），谷口正子訳（2003）p. 259
- (12) 2013年8月，レクスボード村に行くために筆者が乗ったタクシーの運転手は，小学校の教師である彼の妻はDouaiの師範学校出身であるが，Douaiにはすでにその学校はないこと，レクスボード村はベルギー国境まで8キロの地点にあり，このあたりでは，ベルギーで使われるオランダ語であるフラマン語を日常話す住民もいると語った。
- (13) デュラス（1984），清水徹訳（1992）p. 147。なおオプスキュールObscurという姓は，形容詞obscurの持つ意味「はっきりしない，漠然とした」を連想させる。
- (14) Vallier（2006）p. 61
- (15) *Ibid.*, p. 34
- (16) *Ibid.*, p. 37
- (17) *Ibid.*, p. 85
- (18) デュラス／ポルト（1977），舛田かおり訳（1995）pp. 106-110
- (19) Vallier（2006）p. 312, p. 342
- (20) *Ibid.*, pp. 331-332
- (21) デュラス（1993），谷口正子訳（2003）p. 266
- (22) Vallier（2006）p. 299
- (23) デュラス（1993），谷口正子訳（2003）p. 257
- (24) Vallier（2010）pp. 193-196
- (25) *Ibid.*, p. 711
- (26) ヤン・アンドレアは2014年7月にパリで死去した。享年62歳だった。

参考文献

- Duras, M. (1954): *Des journées entières dans les arbres*, Gallimard, Paris
Duras, M./Porte, M. (1977): *Les lieux de Marguerite Duras*, Ed., Minuit, Paris
Vallier, J. (2006): *C'était Marguerite Duras*, tome I 1914-1945, Fayard, Paris
Vallier, J. (2010): *C'était Marguerite Duras*, tome II 1946-1996, Fayard, Paris

デュラス／ポルト（1977），舛田かおり訳（1995）：『マルグリット・デュラスの世界』青土社
デュラス（1984），清水徹訳（1992）：『愛人 ラマン』河出書房新社
デュラス（1993），谷口正子訳（2003）：『外部の世界 ― アウトサイドⅡ』国文社
デュラス（2006），田中倫郎訳（2008）：『戦争ノート』河出書房新社